

## 日本色彩学会関東支部 2020 年度講演会開催報告

Report of the Kanto Branch Symposium

### 「矢口博久先生 Judd 賞受賞記念講演：一人ひとりの表色システム」

若田忠之(関東支部幹事/早稲田大学)

昨年、本会会員の矢口博久先生(千葉大学名誉教授)が色彩学分野最高の荣誉であるジャッド賞(Judd Award)を受賞され、この偉業を讃える受賞記念講演会がACA2019 Nagoyaにおいて開催されました。本講演会では、AICにて英語で講演された内容を日本語で分かり易く解説していただきました。

当日は98名が参加し、Web開催という特性も重なって関東支部以外からも非常に多くの参加がみられました。

開催日時：2020年8月29日(土)

講演者：矢口博久先生(千葉大学名誉教授)

開催場所：Cisco Webex

参加費：無料

進行は矢口研究室OBの岩井幹事(関東支部)が務め、矢口先生のご経歴とJudd賞の紹介の後、講演が始まりました。等色関数と錐体の分光感度、反対色ステージ、輝度と明るさ、観察者条件等色などのトピックについて非常に分かりやすくご説明頂きました。

ご講演は以下のようにまとめられていました。

- CIEの表色系は色覚情報処理の過程に沿って発展してきた。
- 色覚メカニズムのそれぞれの段階で個人差の要因がある。
- CIEを中心とした長い研究、議論を経て、標準的な錐体分光感度(錐体基本関数)が定義され、それに基づいたCIE2015X<sub>F</sub>Y<sub>F</sub>Z<sub>F</sub>表色系が確立された。
- 近い将来には一人ひとりの表色システムの確立が望まれる。

講演後には指定討論が行われました。1人目の指定討論者である阿山みよし先生(宇都宮大教授)は矢口先生の後輩にあたる関係であり、学生時代の貴重なエピソードも披露されました。

Q.いつも余裕があってポジティブでいられる秘訣は

何か？

A.研究を仕事と思わずに義務感に追われないで進めてこられたからだと思う。

Q.今後の色彩工学分野で色覚の個人差をどのように扱っていくべきか？

A.正常色覚者でも高次レベルでは個人差が現れる可能性があること、今後の応用面として色覚のメカニズムが明らかになることで広色域ディスプレイの設計などの諸問題の解決への寄与が期待される。

2人目の指定討論者である須長正治先生(九州大教授)は矢口先生の研究室からの一人目の博士号取得者であることから、矢口先生の研究を受け継いだ内容について討論がなされました。

Q.色差の許容差の落としどころについてはどう考えるか？

A.非常に難しい問題であり、特に写真等の応用的な刺激に対しては色以外の要素も複雑に関連するため、それぞれの傾向に注意することが重要であり、用途に応じて使い分けるべきである。

Q.現場ではあまり重要視されない傾向にあるディスプレイの色差の問題についてはどう考えるか？

A.メーカー等の現場では色差は重要視されていないことが問題として指摘できる。応用的な場面の例として医療現場における内視鏡等の映像では色が重要な手がかりとなることから、今後はそのような場面において色差に関連する問題の解決に色覚研究が寄与できる要素は大きいのではないかと。

参加登録時にも質問を募集しており、色覚に関する素朴な疑問から心理系、建築系、文化系の内容や、矢口先生の研究、色覚研究に関する内容など多くの質問が寄せられ、非常に盛況な講演会となりました。